

氏名・(本籍地) 関 口 中 道 (栃木県)
学 位 の 種 類 博士 (仏教学)
学 位 記 の 番 号 甲第 73 号
学 位 授 与 の 日 付 平成 23 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目 天台教理の基礎的研究
論 文 審 査 委 員 主 査 多 田 孝 文
副 査 塩 入 法 道
副 査 坂 本 廣 博

関 口 中 道 氏 学 位 請 求 論 文 審 査 報 告 書

「天台教理の基礎的研究」

論文の内容の要旨

天台の仏教学研究の伝統的傾向は二系ある。一つは教相的研究で、天台の宗義宗旨を全仏教内において位置づけ、検証することによって権威を明確にしようとするものである。二つは、教観の相を探求するもので、純粹に天台の教えの内容と観法について考察するものである。本論は後者の視点から、天台教義の中心的課題である「四教と三観」の関係とその理解の仕方について研究したものである。

本論は、八章を設けて論じている。

第一章、『三観義』については、二節を設け、隋天台智顛(538～597)著の『三観義』の成立した背景と、その構成について結論した。

第二章、体仮入空観・従仮入空観と「不生生」「生不生」では、四節を設け、『三観義』の内容を検証し、まず問題点を指摘して考察した。智顛の教義の中心課題は、『中論』の三諦偈、『涅槃経』の四不可説などを基点として、天台独自の思想を展開しているが、先学の概論書の、解説と記載の仕方に相違あることを指摘し、論究した。先学は、四教・三観・四不可説の関係について、能詮の教の立場から、通教を生不生、別教を不生生としたが、『三観義』は所詮の理の立場で通教を不生生、別教を生不生と論じたものであると結論した。

第三章、析仮入空観と「生生」では、三節に亘り、『三観義』には、藏教に当る四不可説の「生生」の記載がないことを問題とし、『成実論』『俱舍論』『大智度論』を参照しながら、『摩訶止観』の解釈により、仏法に附せる外道から仏法に入ること示す「化用の所」である機縁のことでありと結論した。

第四章、中道第一義観と「不生不生」では、二節にわたり、教と観の関係を「所詮の理」「能詮の教」の観点から検討した。中道第一義観は、体仮入空観の「不生生」・智徳・俗空と、従仮入空観の「生不生」・断徳・真空の二観を方便道とし、真修・縁修の二辺を離れることを指すと確認した。また「能詮の教」の視点から、円教の漸円と純円との差異について検討し、次章の提起としている。

第五章、一心三観と四不可説では、三節を設け、ここまで論じてきた三観と四不可説の関係について総じて論じ、四不可説の説示は全て思議境におけるもので、不思議境は「不生生」「生不生」で表される。そこには惑の存在が認められず、全てが融じられている。また、思議の説示は智慧の側面だけではなく、慈悲の側面、すなわち四悉檀によって示されたものであることを確認した。

第六章、三転読文については、四節を設け、前章まで三観について論じたが、その基点である『法華玄義』の三転読文について考察した。ここでは諸先学の解説を検証し、本論者の先の『三観義』の論述と照らし合わせるならば、大宝守脱氏の解説が正確であると論じた。

第七章、四悉檀については、三節を設け、可説・慈悲の側面をあらわす四悉檀について考察した。

第八章、三観と四悉檀については、六節を設け、三観はどのような機縁に対しても、それを修する機縁は必ず第一義に至るように、慈悲の側面が重視されて、綿密に四悉檀が用いられていることを考察した。

審査結果の要旨

本論は、天台智顛の教理思想の基礎的理解を試みるに当り、「親撰」と目される『三観義』『法華玄義』『摩訶止観』などを中心的資料に、宗学における教義論を前提としながら、教えの構造と修道のあり方を検証したものである。

三観と四教、四不可説、四悉檀の関係を読み解こうとした論文であり、三転読文にまで及ぶ確固たる思想研究である。

論者は、博士前期課程の時代から四教と四可説、四不可説の関係が、『三観義』と智顛の他の著作の記載とで異なることに着目して研究してきた。その成果を本論にまとめ、能詮の教の立場を所詮の理の立場の問題であろうとし、能詮の教の立場は四悉檀に依るのであって、慈悲の発露であるというのが結論である。

本論は、天台智顛の著述をよく解読し、その複雑な思想構造を明快にしようとする努力は認められるものである。各章での結論も的確であり、特に、論者が従来疑問視していた四教・三観・四可説・四不可説の表示の関係についての結論は、見るべきものがある。

全体として天台仏教を理解していると思われるが、少しく煩雑な思考の繰り返しと、理論に偏重しすぎているところがある。理論に偏ると極めて視野が狭くなり、時として広い仏教の何処に関連しているのか見えにくくなる。

例えば、第二章に「空もまた塵沙の惑である」という記述があるが、通説とは明らかに違う自説であろうが、これを言うためには証明が必要となる。『涅槃経』との考察・梁代の教学・成実と涅槃宗など、天台の仏教成立に到るまでの所説について広く論ずる必要がある。教と理の分別にこだわり過ぎて、天台の教・行・人・理の四一などについてどう考えるか課題が残っているので、今後は是非研究することを望む。

また第五章では、本論の根底には般若の空思想があり、天台智顛はこれを基盤とし、三観を用いて真と俗の関係を解りやすく説いたのであるから、般若思想について研究してから論を試みるとよいであろう。さらに惑と解について、理解しているようであるが、教・行・証についても考察することが必要である。

五

第七章・四縁についての論述では、毘曇の因縁・次第縁・縁縁・増上縁を考察すべきである。

本論文の論旨は充実したもので、だいたいにおいて要点を捉え理解している。しかし概念にとらわれ理論に偏ると、天台思想から逸脱しかねない。読む人が十分理解できるか、視点を少しく変えて論ずることが望

まれる。

今後の研究課題について、論者が自ら提起しているとおり、他の大乘論師の説示、広く南北朝の諸師の説などの解明と、天台との比較によって、さらに解りやすい研究成果が挙げられると期待している。

以上、本論は天台智顛の複雑な思想の解明に取り組み、その問題提起・方法論・資料の扱い・論証と結論など、論者の特色が認められる。よって、課程博士学位請求論文として、十分認められるものである。